

# 〔仙教學專攻〕

## 摩訶僧祇律の研究

吉 元 正 信

律藏の文獻は梵漢巴等多種多様であるが、資料として完全に整つたものとして漢訳の四分律、五分律、十誦律と本論であつかう摩訶僧祇律及び南伝巴利律であり、又この外に漢訳十八部九九卷に及ぶ根本有部毘奈那があり、その多少欠けたる部分は、西蔵訳の完全なものがあり、補ひ得るのである。しかし本論であつかう摩訶僧祇律をのぞいては他の五律は全て上座部系統の部派に伝承されたものである。そこで摩訶僧祇律はどの部派に属するものであるかということであるが、一般の定説として大衆部であるとするのが認められているのである。しかし本律に関して述べる前に、それが本当に大衆部系統部派に属する事を証明する必要がある。なぜなら本律大衆部外の部派に伝持されたと思わせる伝承を、見つけるからで

ある。

そこで第一章に於て、「出三蔵記集」にその焦点をおいて、本律が大衆部系統部派に伝持された律藏であることを述べ、その後に律藏自身に大衆部系統の部派の性格との共通性を述べて見たのである。第二章に於ては、本律が大衆部系統の部派であることを思わせる、七百会議の記事、一般に第二結集と呼ばれる記事で律藏の難度部中に存する。僧祇律では、この記事に関して述べている所は「七百集法藏」と題しているのである。そこでその時、會議の中心議題であつたと思われる、受蓄金銀に関して、本律部派の特色をさぐつて見たわけである。その結果、第二章に於て律藏の成立年代は淨法（律に制定された規則の解釈の幅を広げようとする便法の事）との關係に於ても解明できる事を発見したわけである。しかし本卒論に於て、本律の成立年代を明らかに出来なかつたことは残念である。

以下、本卒論の構成を述べると次のごとくである。

「第一章、摩訶僧祇律の伝持部派について」と題し本章は三つの角度から本律の伝持部派について述べた見た。

第一は、前述したが「出三藏記集」によつて示された問題に対する検討である。「出三藏記集」の「新集律來漢地四部序錄」によると、本律を「本律」を「婆鹿富羅律」と題し、本律に対して次のごとき説明を加えている。「婆鹿富羅とは、經典を受持し、皆有我を説き、空想を説かず。猶お小兒の如し、故に婆鹿富羅となす。此の一名は僧抵律なり」というのである。「出三藏記」によると本律を伝持したのは、上座部系統の部派である犢子部をさしている事は明らかである。そこでこの問題に対し検討を加え、「出三藏記集」の本律に対する見解は明らかに僧林の誤解から生じた事を述べ、本律が大衆部に伝持されたとする事に矛盾が生じないとの結論に達するのである。第二は本律自身の内容が大衆部の性格、又伝承と一致するかどうかと「七百會議の記事に焦点をしばつて述べた。その結果、本律の七百會議の記述が南伝文献が述べる部派分裂の記述の七百會議をもつて大衆、上座の根本分裂があつたとする、一つの資料となると共に、本律を編集した部派が大衆部であるとの想像を、その記事の他律との相異や特異性より可能にする。第三に大衆部

系統の部派である説出世部の伝説である「大事」と本律の「受戒嚧度」との共通点を発見する事が出来るのである。その共通点は他律には見えないものである事より、本律が大衆部であろうとの結論に達するのである。以上三つの方面より検討の結果、本律の伝持部派を大衆部とする事は妥当であるとの結論を出す。

『第二章、「七百集法藏」と「受蓄金銀」に関する淨法について』と題し、本章も三つに分けて論じた。第一は、本律の「七百集法藏」そのものについて分析をし、第二には、他律の第二結集記事との比較により、第二結集の年代に関して論じ、その結果、本律には七百會議の年代は旧記されていないが、七百會議の年代は仏滅一〇〇年前後であるとの結論をもち、第三には、本會議の中心議題と思われる。「受蓄金銀」に関して、波羅木又中に出る「蓄錢宝戒」を中心に、金錢に関する淨法について述べ、ここに於て、淨法との關係に於ても律の成立年代の解が可能なる事を発見するのである。以上で私の卒論は終る。本卒論を書きながら、本律の研究が他律にくらべ極めて初期にある事を知つたと共に、部派仏教分析

の一つのかぎをにぎっている大衆部の性格が、いまだ明らかにされていない現在、本律の研究はきわめて重要である事を感じた次第である。

インターネット公開許諾のない文章には  
墨消し処理を施しています。